

「運動的本質」を呼び起こす建築

AN ARCHITECTURAL PROPOSAL THAT EVOKES “KINETIC ESSENCE”

12323019

野田理裳

主査 宮 晶子

教授

副査 片山 伸也

教授

篠原 聡子 教授

何かを「しなければならない」「せざる負えない」と受動的な運動には、目的が先行し空間に意識が向かず身体と空間との乖離を感じる。一方、「こっちに行ってみよう」や「ここに座ってみよう」などの能動的な運動を行うことができる場所には身体と空間が結びつく感覚がある。そして、これらの行動の手前には能動的な運動を喚起する、機能や用途を超えた無意識に働きかけるものがあるのではないかと考える。哲学者メルロ=ポンティは『知覚の現象学』の中で、私達は目の前のものに意識を向ける「見つける」という知覚と運動が一つになったシステムが働くとして述べている。私たちは場所に対しまなざしを向け空間的な位置関係を把握しようとする。そして位置関係を手掛かりに次の運動を動機づける「運動的本質」が働き、運動がおこり応答することで身体と空間が結びつくとする。修士制作では、どのような構成によって「運動的本質」が働くのかということをもとにメルロ=ポンティの知覚論から自身の体験を空間分析し「運動的本質」を呼び起こす建築を提案する。「運動的本質」が繰り返し呼び起こされることで、身体と空間の結びつきが強くなり人々の心が満たされる提案を目指す。

Keywords: kinetic essence, perception, incentive, positioning, empirical cores, connection

運動的本質, 知覚, 動機づける, 位置関係, 経験的中心, 結びつき

1. 序論

1-1. 研究背景と目的

何かを「しなければならない」「してはいけない」と受動的な運動には、目的が先行し空間に意識が向かず身体と空間との乖離を感じる。一方「こっちに行ってみよう」や「ここに座ってみよう」などの能動的な運動を行うことができる場所には、自分自身で場所を把握したと身体と空間が結びつく感覚がある。例えば、幅の広い道を歩いていたときに横に細い路地があったとしよう。その路地は家が両側に並び少し曲がっていることで先が見えず、木漏れ日が少し差し込み心地よい風が吹いている。足元はゴツゴツとした石畳と、所狭しに並べられた植木鉢が置かれている。このような路地を見つけると無意識に「この路地に入ってみよう」と足を進めてしまう。一歩進むごとに五感でその場所を感じ、今まで見えなかった場所を獲得していく感覚を得たとき、自分自身がこの場所に在るという感覚が生まれる。このように、無意識的にも直感的に行動することができた時、身体と空間が結びついたと感じ心が満たされる。そして、これらの行動の手前にはそれらを喚起する機能や用途を超えた無意識に働きかけるものがあるのではないかと考える。

哲学者メルロ=ポンティは『知覚の現象学』の中で、私達は目の前のものに意識を向ける「見つける」という知覚と運動が一つになったシステムが働くとして述べており、知覚によって得たものから運動的本質を呼び起こし、身体と空間の結びつきを強くするとある。この運動的本質が呼び起こされるきっかけを考察することで、人々の行動の手前にある無意識に働きかける構成を明らかにし身体と空間が結びついたと感じる空間を提案する。

1-2. 構成

1章では、研究背景と目的、本研究の構成について述べる。2章では、メルロ=ポンティの『知覚の現象学』を取り上げ、私たちが目の前のものをどのような流れで知覚しているのかについて述べる。3章では自身が体験した空間の中でどういった場面に運動的本質が働くのかということを描き出しメルロ=ポンティの知覚論をもとに記述し評価を行う。4章にて運動的本質が働いていく空間構成を3章の分析から述べる。5章では、運動的本質が働く空間がどのような関係性で配置・構成されていると身体と空間が結びついたと感じるのかということを考察する。これらをもとに6章で設計を行い7章で結論と今後の展望を述べる。

2. メルロ=ポンティの知覚論

メルロ=ポンティは 1945 年に発行された『知覚の現象学』¹⁾によると、私達は目の前のものに意識を向けると「見つける」という知覚と運動が一つになったシステムが働くとして述べており、以下の流れで世界を知覚しているという。

2-1. まなざし

私たちは対象に対し好奇心や観察という態度によって光景に対しまなざしを向ける。まなざしは視覚的存在にとどまらず、触覚的・聴覚的・嗅覚的感覚など対象に働くすべての感覚を感覚的存在として感じており、複数の感覚が相互に働く潜在的運動が起こる。また、まなざしを向けた先の光景は網膜を占める面積の「大きさ」「距離関係」「異なる表面構造の差異を反射させる照明」の3つによって組織化されており、それらに対しまなざしを向け光景を捉えている。

2-2. 手掛かり

組織化された光景から感覚的性質を感じた私達は、それらの感覚から「上と下」「奥行」「運動-背景」の3つの位置関係を捉えようとする。空間の方向性は対象を認識し意識するための手段であり、足下など何かを支える土台を下、その反対を上と方向づけている。また、一度現在の知覚する自分の位置を離れ、別の視点から見ていることを想像して幅を理解し、身体と対象との距離を見ることで「奥行」を理解しているという。そして、光景の中には同じ場所に留まらず動いているものを運動、その周りにあるものを背景とし運動からその軌跡を認識することで「運動-背景」の位置関係を捉えようとしている。

このように光景の位置関係を捉えようと、さらにその位置関係を捉えようと次の運動が働く。そのきっかけとなるもの一つとして潜在的触覚があると述べられおり、次の運動を誘発する空間の手掛かりによって自らの潜在的な感覚を無意識に感じとり、次の運動を喚起する運動的本質を得るといふ。

2-3. 運動思考から応答

運動の本質によって運動が動機づけられ身体が動き、新しい光景に出会うことで場所を認識し応答を受け取る。この知覚と運動が一つになったシステムが働くことで身体と世界が噛み合ったと知覚するとあり、これらを多く繰り返すことで身体が世界と噛み合ったと感じると述べられている。

2-4. 建築化のための考察

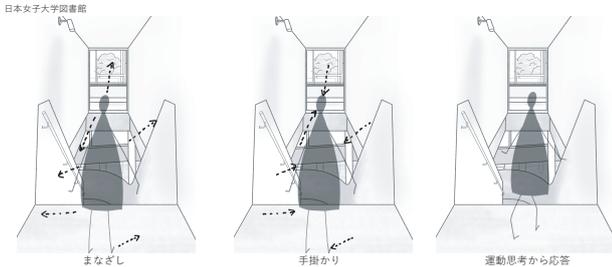


図1 知覚と運動が一つになったシステム

日本女子大学図書館を例にメルロ=ポンティの知覚論を図に表すと図1となる。光景に対し「まなざし」を向け「手掛かり」を得る。その「手掛かり」から運動の本質が働き一歩を踏み出したいという「運動思考からの応答」が生まれる。その結果能動的に場所を獲得していくような感覚となり身体と噛み合ったと感じるのである。

その運動の本質を生むまなざしと手掛かりには、「エッジの量」と「感覚の厚み」が関わってくると考える。エッジは空間の形を表すエッジや空間の中にある壁や柱などの構造体のエッジ、光が差し込み照らされている部分のエッジなど視覚的な様々なエッジのことであり、その「エッジの量」がまなざしを生み位置関係の手掛かりを作り出す。「感覚の厚み」は音や匂い、触覚的な感覚など目には見えない多くの感覚的性質を表す。例えば、板の目の床はフローリングの床に比べ軋み音や木の匂い、節の触覚など感覚的性質が多く働き、感覚的な経験が厚くなる。この「感覚の厚み」が厚いことで、まなざしが向けられやすくなったり手掛かりとなったりする。このように運動の本質を呼び起こすためには「エッジの量」が多いこと、「感覚の厚み」が厚いことが重要なのではないかと仮説を立てた。

3. 空間体験の分析

3-1. 分析方法

前章の仮説に基づき「エッジの量」と「感覚の厚み」について既存の建物を評価し、運動の本質が働く空間について考察する。実際に体験したことがある空間(図2)を、視覚的・聴覚的・触覚的・嗅覚的に感じたことをスケッチしより強く感じたものを太い線、濃く表現する。(図3)

1 那須塩原市図書館 みるる	26 日本女子大学 書彩館
2 京都市京セラ美術館	27 日本女子大学 図書館
3 TOTOミュージアム	28 アクロス福岡
4 十日町中央公民館	29 倉敷市立美術館
5 中心のある家	30 BONUS TRACK
6 菅川豊彦記念松沢資料館	31 十日町情報館
7 桜台の家	32 仙台市文学館
8 コレツィオオーネ	33 粟津邸
9 ベネッセハウスミュージアム	34 京都駅ビル
10 表参道ヒルズ	35 越後妻有里山現代美術館MonET
11 ANDO MUSEUM	36 岡山県庁舎
12 KAIT工房	37 福岡市美術館
13 KAIT広場	38 代官山ビルサイドテラス
14 北九州市中央図書館	39 スパイラル
15 北九州市立美術館	40 JタワーKITTE
16 長崎リリックホール	41 那須の山荘
17 せんたいメディアテーク	42 フロム・ファーストビル
18 アイランドシティ中央公園中核施設ぐりんぐりん	43 新宿フラッグス
19 岡山市立オリエント美術館	44 国立西洋美術館
20 岡山県立美術館	45 九州国立博物館
21 搬津美術館	46 豊島美術館
22 アオーレ長岡	47 那須塩原市まちなか交流センターくるる
23 フォレストゲート代官山 MAIN棟	48 ハラカド
24 仙台市博物館	49 Urban Green
25 日本女子大学 百二十年館	50 sarugaku

図2 分析事例一覧

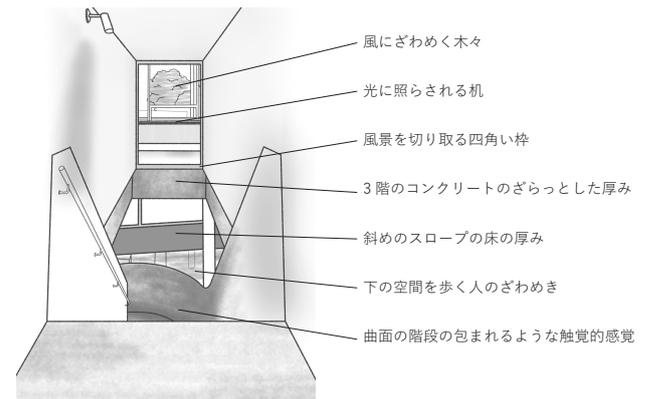


図3 感覚スケッチ

3-2. エッジの量と感覚の厚みの四象限

分析リストのエッジの量の評価を横軸に、感覚の厚みを縦軸に四象限にまとめると図4のようになる。その結果、エッジの量が多く感覚の厚みが厚い方がより運動の本質が働き運動思考へとつながることがわかった。

- 側面を感じる ▲領域（分節） ◆領域（結合） ■領域（リズム） ★道筋が描ける
- 側面を感じない △大きい領域 ◇領域が一つ □連続しない ☆道筋が描けない

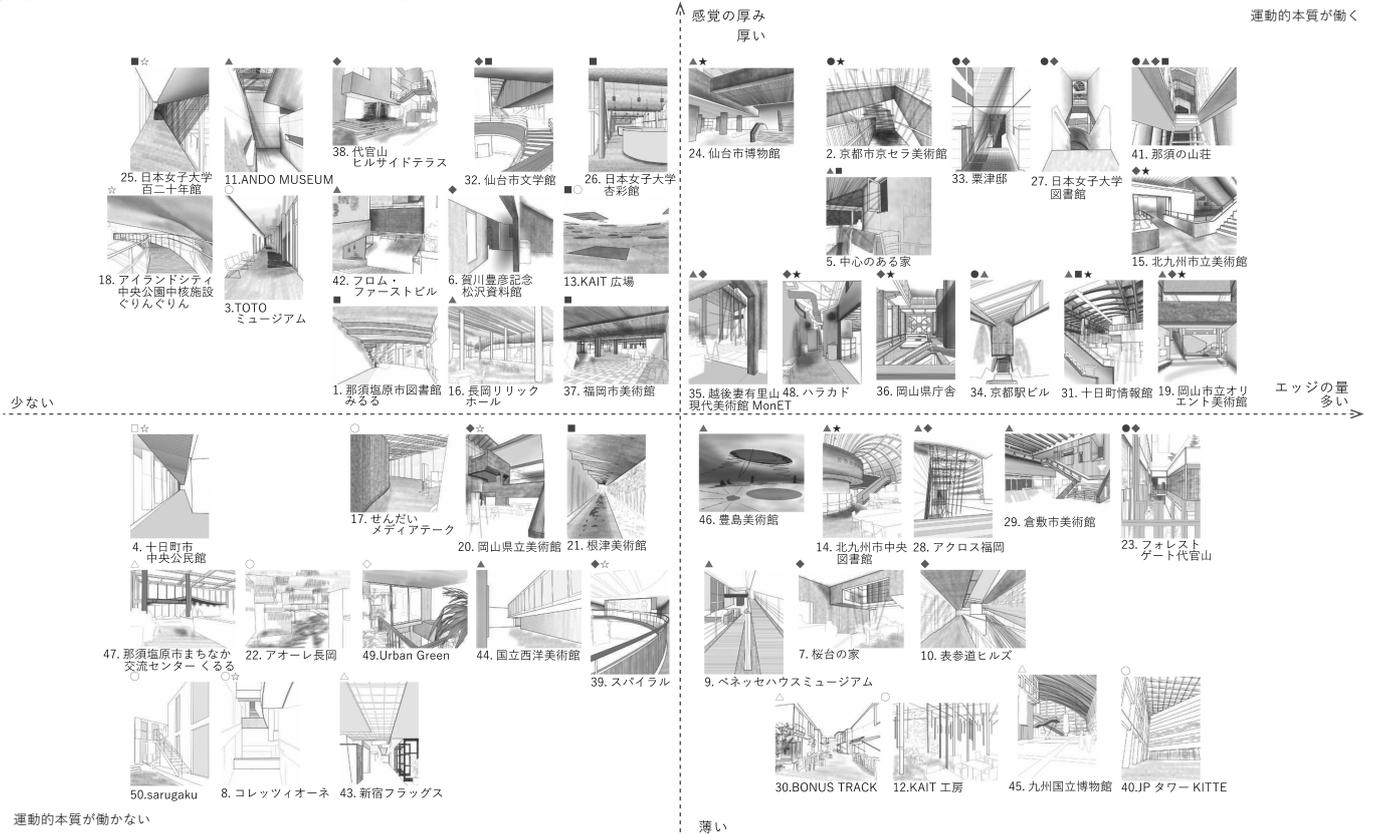


図4 エッジの量と感覚の厚みの四象限

4. 運動思考が働く手掛かり

図4から比較分析を行い、次の4つが関わっていると考える。

4-1. 立体の側面を感じる

「KAIT 工房」には運動的本質が働かない。その理由として立体の側面を感じないからではないかと考える。(図5) 大きい空間の中に、細く薄い柱が乱立しておりエッジの量は多い。しかし、柱の側面が薄いため、まなざしは生むが奥行の手掛かりがなく、その結果どこに進んで良いのかということがわからず不安になり運動的本質が働かないと考える。

一方、「京都市京セラ美術館」の1階から地下1階へ降りる階段には運動的本質が働く。(図6) 地下へと続くこの階段は新しい空間に入り込むという次の行動を想像し進み出したくなる。その理由の一つとして、三角形に空いた1階の床の厚みを強く認識することが影響していると考えられる。両側の床の厚みを知覚しそれらが終着する三角形の頂点へと意識が向き自然とその先の空間にも意識が向く。そして、真っ直ぐな階段の先には曲がった道が広がっていることが見え、地下からの人の音や温かい光によるざわめきを感じることで進みたくなる。床の厚みという側面が手掛かりとなりその先の空間へ意識が向く。また、床面の三角形と下方向に伸びていく階段という二つの形の立体が組み合わせられたような感覚があることでより多様な奥行の手掛かりを生む側面を感じることができるのではないかと考える。

このように、運動的本質が働く空間には立体の側面を感じるということが重要なのではないかと考える。立体の側面を感じることでより、私たちは奥行の手掛かりを知覚し、運動的本質を得ることができる。

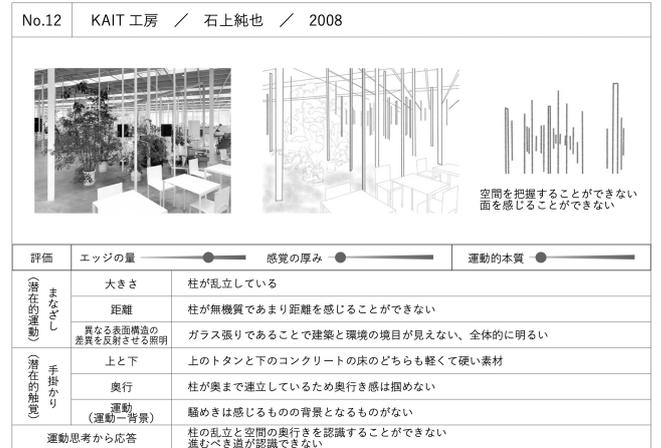


図5 KAIT 工房

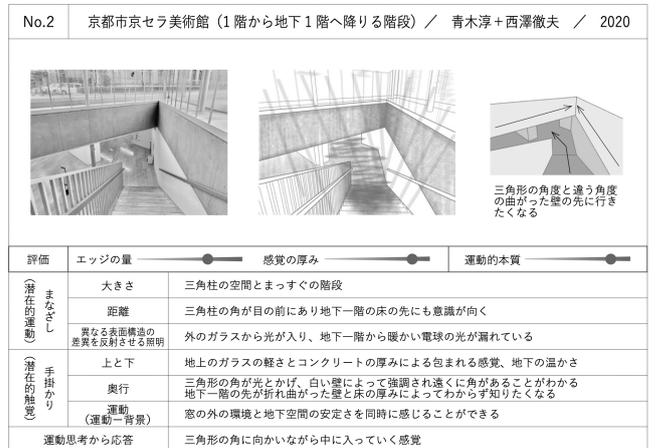
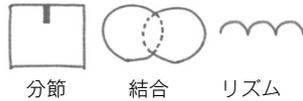


図6 京都市京セラ美術館

4-2. 複数の領域を経験する

運動の本質が働く空間には複数の領域があることが重要であり、その方法として3つを挙げる。



(図7) その領域が3つ以上重なっていることが大切である。

図7 領域の分かれ方

4-2-1. 分節

「九州国立美術館」の1階のエントランスは曲面の天井による一つの空間であり分節するものがないため運動の本質が働かない。(図8) また、大きな空間であることでエッジの量が多いが身体的スケールとかけ離れており、運動-背景の手掛かりを得ることができず次の運動が起こりにくいと考える。

一方、空間が分節され運動の本質が働く例として、「岡山市立オリエント美術館」の1階中央ホールを取り上げる。(図9) 2階まで吹き抜けており上には渡り廊下、奥の空間には幅のある梁に階段、2階の展示スペースが明るく見える。垂れ壁や腰壁、渡り廊下、柱などの要素のエッジが空間を分節し運動-背景の手掛かりとなる。空間を完全に分割するのではなく一部を遮り分節するものであることで、少しの動きで異なる場所性を経験できるからだと考えられる。このように、空間を分節する要素はエッジの量が増えまなざしが向けられやすくなるだけではなく、運動-背景の手掛かりとして働く。

No.45	九州国立美術館 (1階エントランス) / 菊竹清訓 / 2004	
評価	エッジの量 ●●●●● 感覚の厚み ●●●●● 運動の本質 ●●●●●	
潜在的運動 (まなざし)	大きさ	曲面の屋根と大空間
	距離	大きな空間で距離感が掴みにくい
潜在的運動 (異なる表面構造の差異を反射させる説明)	異なる表面構造の差異を反射させる説明	正面がガラス張りで光が入ってくる、植物が見える
	上と下	天井の細い竹とフラットな床
手掛かり (潜在的感覚)	奥行	とても遠くに折返し階段や展示物があり一番奥にガラスがある
	運動 (運動-背景)	ざわざわとした人の動きが奥にある
運動思考から応答	身体よりも近い位置に構造物がないため進みたいと思えない	

図8 九州国立美術館

4-2-2. 結合

領域が複数存在しているものの「アオーレ長岡」(図10)には運動の本質が働かなかった。大きな屋根がかかった空間の中に四角い会議室が位置関係を変えながら幾つも集まっている。しかし、それらの空間は閉鎖的であり中の様子がわからない。ただ空間が隣り合っているだけで結合できていない。また、四角い会議室の空間がガラス張りに黒い壁・木の板と同じようなデザインであるため、働く感覚も似ている。そのためより単なるボリュームが隣り合っている認識に留まり、行ってみたいと誘発されないのではないかと。

「日本女子大学図書館」の2階の階段は複数の領域が結合する良い例である。(図11) 階段の向こう側には2階の通路のようなスペース、下にはスロープと1階、そして窓の向こう側には外の風景が見えるといったように複数の領域が隣の領域に開きながら結合している。そして、白い硬い天井/グレーの柔らかい絨毯、手前に照明に照らされたカーブする階段/奥の薄暗い地下、木々・車・自然光の動き/図書館の静かさなどと、対比的な領域が結合しているためそれぞれの領域からの手掛かりによって感覚の厚みが生まれ、それらをさらに捉えたいと運動の本質が働いている。また階段の他にも、吹き抜けやテラスなども領域を結合する手段となる。

このように、それぞれの領域に広がる空間を想像することができる領域が結合していることが大切である。自分がいる位置から異なる領域を感じ取ることで、さらに知りたいと次の運動が誘発されると考える。

No.22	アオーレ長岡 (1階ナカドマ) / 隈研吾 / 2012	
評価	エッジの量 ●●●●● 感覚の厚み ●●●●● 運動の本質 ●●●●●	
潜在的運動 (まなざし)	大きさ	すのこのような板が浮いている四角いキューブが組み合わさっている
	距離	大きな半屋外の空間 とても高いところに四角いキューブがある
潜在的運動 (異なる表面構造の差異を反射させる説明)	異なる表面構造の差異を反射させる説明	直射日光は遮られ全体的に明るい空間になっている
	上と下	地面よりも上のこの板に意識が向く
手掛かり (潜在的感覚)	奥行	四角いキューブは白と黒の色がはっきりしていることで空間を認識しやす一番奥の空間が暗いため何が広がっているのかわからない
	運動 (運動-背景)	ざわめく人々とのこによって
運動思考から応答	進む先が暗くて見えず、周りのボリュームがガラスとすのこで覆われ中が見えづたいと思えない	

図10 アオーレ長岡

No.19	岡山市立オリエント美術館 (1階中央ホール) / 岡田新一 / 1979	
評価	エッジの量 ●●●●● 感覚の厚み ●●●●● 運動の本質 ●●●●●	
潜在的運動 (まなざし)	大きさ	2階の渡り廊下とその先に吹き抜けの梁が見える 2階に上がるための階段と展示品がある
	距離	手前に渡り廊下と奥には階段がある 窓があったり2階の展示品がガラスから見える
潜在的運動 (異なる表面構造の差異を反射させる説明)	異なる表面構造の差異を反射させる説明	大きな吹き抜け空間の天井から光が入っている
	上と下	コンクリートのゴツゴツとした梁と吹き抜け 下はそれらを受けとめるフラットな床
手掛かり (潜在的感覚)	奥行	渡り廊下によって手前の空間と奥の吹き抜け空間の二つがある 階段によってその先の空間にも誘導している
	運動 (運動-背景)	光が多様な揺らぎが奥のホールに照らしている
運動思考から応答	梁によって区切られている次の領域に行きたくなくなる その先には揺らいでいる光とさらに次に行く階段、展示が見える	

図9 岡山市立オリエント美術館

No.27	日本女子大学 図書館 (2階) / 妹島和世 / 2019	
評価	エッジの量 ●●●●● 感覚の厚み ●●●●● 運動の本質 ●●●●●	
潜在的運動 (まなざし)	大きさ	緩やかにカーブをしながら降りていく階段
	距離	小さな窓から見える木々と車
潜在的運動 (異なる表面構造の差異を反射させる説明)	異なる表面構造の差異を反射させる説明	グレーの絨毯とぼんやりとする光
	上と下	白い硬い天井とグレーの柔らかい絨毯
手掛かり (潜在的感覚)	奥行	階段が手前にあり隣り場から奥の薄暗い地下が見える 階段の白い側面の滑り坂とカーブする階段
	運動 (運動-背景)	木々と車と自然光の動きと図書館の静かさ
運動思考から応答	奥にある地下空間や小さな窓の動きが気になり先に進みたいくなる 曲面の階段が身体を包み込むような安心感がある	

図11 日本女子大学図書館

4-2-3. リズム

「十日町市中央公民館」(図12)は運動の本質が働かない。その理由として、柱が連続するリズムと天井面の板が連続するリズムが異なるため領域を構成するためのエッジとして働かず、一つの細長い領域としてされてしまうということが考えられる。また、天井の板はとも間隔が狭いためその間に領域を認識することができず、一つの面のように認識してしまい運動的本質を呼び起こすエッジにはならない。連続の仕方が複数の領域を生み出すエッジになっていないことで、一つの長い空間に感じられ同じような感覚的経験がこの先も続くことが予測され前へ進みたいという運動-背景の手掛かりが生まれにくい。

複数の空間が連続し運動的本質が働く例として、「那須の山荘」を取り上げる。(図13)家形のフレームが連続し一定のリズムで空間が生まれている。手前に階段の領域があり、家形のフレームによってリズムが生まれている空間の先には木々が揺れている外の景色がある。連続する空間の奥は太陽光によって明るく、木々のざわめき、一階からはキッチンからの音が聞こえるなど複数の感覚が働くものがあるということも運動的本質を呼び起こすきっかけとなっている。家形のフレームが連続することにより、奥行方向に複数の空間が生まれ、さらに奥の複数の感覚が働く空間に行ってみたく運動の本質が呼び起こされる。

このように、フレームが連続することにより複数の領域が生まれ、奥行の手掛かりと感覚の厚みが運動の本質を呼び起こす。しかし、連続するリズムが異なるとそれらのエッジを頼りに領域を知覚することが難しく、一種類の連続のリズムでないと空間が領域に分けられない。また、フレームによる連続の他に、アーチの天井が連続することでも同じようにそのエッジを頼りに前へと動機づけられ、運動の本質が働くと考えられる。

4-2-4. 3つの領域を経験する

このように分節・結合・リズムによって作られた複数の領域を経験することが重要である。そしてその並び方を分析する。図4の四象限の右上の、感覚の厚みが厚くエッジの量が多かった運動的本質が強い13事例の領域の組み合わせ方を図示すると、3つの領域を経験することが大切だと考えられ、その形式は図14の3つに分けることができる。

① 直線型

3つの領域が身体の向いている向きに対し一直線に連続している事例である。「栗津邸」や「京都駅ビル」は視覚的に領域の境がわかりやすく、1歩を意識して踏み出す。一方「京都市京セラ美術館」や「ハラカド」、「十日町情報館」は自分がある領域とその次の領域の境が腰壁などで明確に分かれておらず更に先の領域への惹きつけが強いことで行ってみたいとなる。また、「十日町情報館」や「仙台市博物館」は一つの大きな空間の中で領域が分かれているため、たどり着く先の空間を異なる領域から認識し直したいと動機づけられる。

例えば、「栗津邸」は開放的な空間から閉鎖的な細い階段、そしてその先にとても広いぼんやりと明るい空間の3つの領域が結合するように一直線に領域が連続し、前へ運動が誘発される。

No.4	十日町市中央公民館 (1階廊下) / 梓設計 / 2017		
			
	簡単な構成 柱や天井の板が連続しており、その先に進んだ時に捉えるエッジに変化があまり起こらないということが予測できる。そのためあまり先に進みたいと思わない。		
評価	エッジの量 ●	感覚の厚み ●	運動の本質 ●
(潜在的運動) まなざし	大きさ	天井の木の板とコンクリートの柱とグレーの木目の壁	
	距離	まっすぐな通路	
	異なる表面構造の差異を反射させる照明	あまり強い光はさしてこない	
(潜在的触覚) 手掛かり	上と下	上への意識が強い	
	奥行	とても遠くまで続いていることが、正面の小さい四角からわかる	
	運動 (運動-背景)	左側は全面ガラスであるため光は全体に入り奇跡が見えず認識することができない	
運動思考から応答	コンクリートの柱の連続と天井の木の板の連続、空間を簡単に把握することの安心感		

図12 十日町市中央公民館

No.41	那須の山荘 (1階から2階へ登る階段の途中) / 宮晶子 / 1998		
			
	家形のフレームが並び領域が連続する 身体スケールの細い通路、奥にある賑やかな音と明るい光が先へと意識を向けるきっかけとなる		
評価	エッジの量 ●	感覚の厚み ●	運動の本質 ●
(潜在的運動) まなざし	大きさ	家形の木の板と厚みのある2階の床が浮いているようにある	
	距離	家形の木の板が奥にいくにつれ小さくなっていく	
	異なる表面構造の差異を反射させる照明	窓の奥が明るい	
(潜在的触覚) 手掛かり	上と下	家形の板に沿った天井と真ん中に床が差し込んでいるようにある	
	奥行	細い隙間から見える先へと促すバース 家形の板が奥へと並び、一番奥の窓ガラスの明るいところへと促す	
	運動 (運動-背景)	窓の外で木々が揺れ、一階の奥のキッチンからは賑やかな音が聞こえる	
運動思考から応答	連続する領域の先に賑やかな音と明るい光が先へと意識を強く向ける		

図13 那須の山荘

② 分岐型

一番向こう側にある領域が分節されることで2つに分かれている事例である。「那須の山荘」「日本女子大学図書館」「岡山県庁舎」の3つは高さ方向に異なる領域が2つある。「岡山市立オリエント美術館」は奥行方向に2種類の領域が遠くにあり、「越後妻有里山現代美術館 MonET」は斜めの位置関係に領域がある。認識することができるものの中には辿り着けない向こう側に領域が二つあることで、把握しきれない領域に意識が向く。そしてこれらの位置関係を把握したいと動機づけられ、この構成が最も運動の本質が働くと考えられる。例えば、「那須の山荘」はフレームのリズムの中に2階の床が挿入されている。身体的スケールの細い階段に立つと、一階の奥にはキッチンがあり2階には明るい光が差し込む空間が予測でき、高さ方向の異なる領域が向こう側に2つありフレームのリズムに誘発されて先へ進みたくなる。

③ L字型

2つ目の領域を曲がった先に3つ目の領域がある並び方の事例である。「中心のある家」と「北九州市美術館」は3つの領域がL字型に並べられており、一部が見えなくなっていたりその先に光がさしていたりと魅力的な先の領域が広がっていることを予測し領域が2つあるよりも前へ進みたくなる。例えば「中心のある家」はL字のコーナーに腰壁があることで2つ目の領域が生まれ角を曲がると更に領域が広がっており、向こう側を知覚したいと運動の本質が働く。

① 直線型

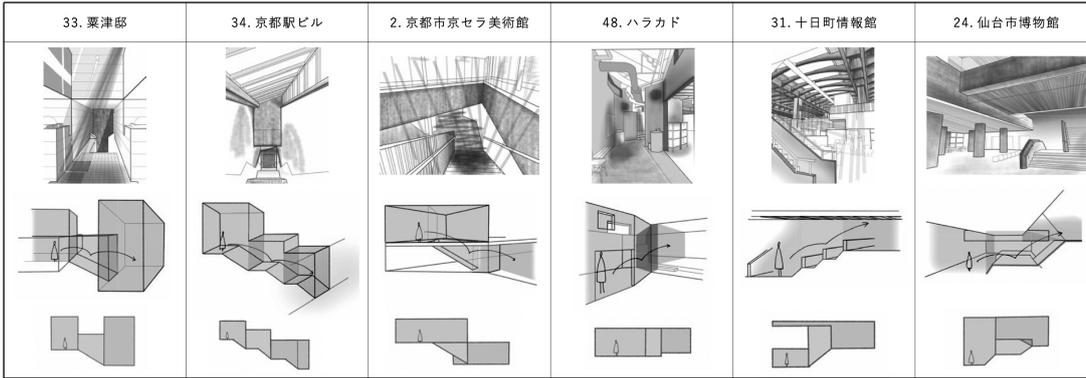
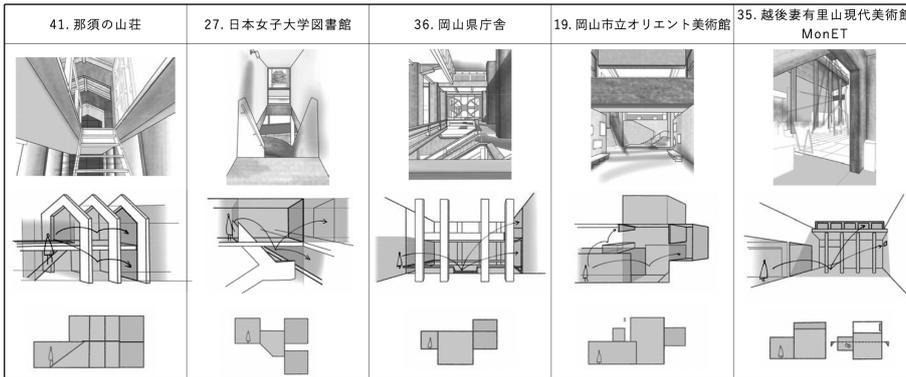


図 1 5
立体的な関係

② 分岐型



③ L字型

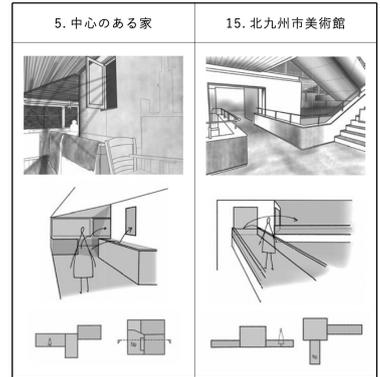


図 1 4 3つの領域の構成

このように、3つの領域が立体的に構成されていることが運動的本質の働く空間には大切だと考えられる。(図 1 5)

4-3. 道筋を頭の中で描く

「岡山県立美術館」(図 1 6)には運動的本質が働かない。地下展示室から上を見上げると、階段や壁によって一つの線のように2階まで結ばれており、簡単に道筋が見えてしまうため想像力が働かない。そのため、運動的本質が働かず前へ進みたいと思わない。

一方、図 1 7の「岡山県庁舎」の2階のテラスは道筋を頭の中で描くことができ運動的本質が働く。向こう側の空間の2階にテラスがあるが、そのテラスへの直接的な行き方は、現在立っている場所からは見えない。しかし、向こう側に広がる部屋が2階まで連続しており、繋がっているのではないかと予測する。そして、向こう側の1階から2階のテラスに建物の中を歩いて行くことができるのではと想像しその道筋を確かめたいと前に進みたくなるのではないかと。

このように道筋を頭の中で描くことができる空間には上下(左右)の手掛かりを生む運動的本質が働くと考え。道筋を補うことができる程度に何かによって遮られることが重要であり、直接結ばれている空間や全く想像することができない空間では働かない。始点と終点のそれぞれから延長した空間の一部が遮られることにより、遮られた部分を補おうと想像力が働き、確かめたいと運動的本質が働くと考え。また、先の空間までの道筋を確かめたいと思うためには、先の空間自体に位置関係の違いや、光や音などの感覚的なざわめきなどの魅力的な手がかりがあることも大切である。

No.20 岡山県立美術館(地下展示室) / 岡田新一 / 1987

行く道筋は見えるものの、その道筋や辿り着く先が不透明で向かいづらい

評価	エッジの量	感覚の厚み	運動的本質
(潜在的運動) まなざし	大きさ 距離	大きな吹き抜けと四角いブロックが2階から浮いている 吹き抜けと遠くに四角いブロックがある	
異なる表面構造の差異を反映させる照明		柔らかい布の間から光が吹き抜け空間に差し込んでくる	
(潜在的触覚) 手掛かり	上と下 奥行	吹き抜けになっていることで2階と3階の位置が見える 3階が手前に出ていることでより意識が向く	
運動(運動一背景)		立ち上がりの壁の高さが高いことで動きがあまり見えない 四角いブロックの角が彫刻的に削られておりエッジに意識が向くがその内容がわからず進みたいと思にくい	
運動思考から応答			

図 1 6 岡山県立美術館

No.36 岡山県庁舎(エントランス) / 前川國男 / 1957

地下空間・向こう側の部屋(途中に吹き抜けがあり領域が分かれている)・2階のテラス
3つの異なる領域が高さ距離が違うところにある

評価	エッジの量	感覚の厚み	運動の本質
(潜在的運動) まなざし	大きさ 距離	四角い柱が並ぶ地下につながる階段と正面に構造補強が入った窓、上にはテラスがある 真ん中の吹き抜け空間によってこちら側と向こう側がある	
異なる表面構造の差異を反映させる照明		右上から光が差し込む	
(潜在的触覚) 手掛かり	上と下 奥行	半屋外空間のテラスと地下へ伸びる階段 手前の通路と真ん中の吹き抜け空間、さらに奥には部屋がある	
運動(運動一背景)		高さの異なる床に光が差し込んでくる異なる場所で過ごす人々の動きも見える	
運動思考から応答		複数の領域がある領域が区別られ向こう側から見、吹き抜け空間をしてその先に行ってみたくなる	

図 1 7 岡山県庁舎

4-4. 曲面の壁

曲面の壁による通路は人々の動きを緩やかに方向づけながらも、その先に広がる空間を更に知覚したいと運動的本質が働くと考え。曲面の壁の例として渡辺仁氏設計の「原美術館」を取り上げ、写真1・写真2をもとに分析を行う。



写真1 通路*1



写真2 ギャラリー*1

写真1の空間では細い曲面の壁による通路と右奥にギャラリーに入るために小さな隙間があり、左側には中庭に向かって窓が開いている。奥がだんだん見えなくなっていき把握しきれないことで前へ進みたくなる。写真2の空間は写真1と同様曲面の壁によって構成されており、奥のまっすぐな壁の向こうにも部屋がある。壁が曲面であることによって、光の変化や音の反響が空間を満たしていると感じられる。奥行の手掛かりが連続的に生まれ感覚の厚みが絶えず変化し、感覚のすこし先を感じ取ろうと進みたくなる。曲面の壁は運動的本質を呼び起こす手掛かりになるのではないかと考える。

5. 身体と空間が結びつく関係性

運動的本質が働く構成について明らかにしてきたが、運動的本質が働く空間がどのような関係性で配置・構成されていると身体と空間が結びついたと感じるのだろうか。2章でも取り上げたが、メルロ=ポンティは『知覚の現象学』の中で、運動に対する応答を受け取ることができると知覚と運動が一つになったシステムが完結し、これらが繰り返されることで身体と世界が結ばれると述べている。運動的本質によって運動が誘発され、目の前の光景が変化しその度に応答を受け取る。このシステムを繰り返すことで空間の位置関係を把握しているのだが、身体と空間の結びつきを強く感じるためにはこれらのシステムとシステムを一つの経験として結びつけることが必要なのではないかと考える。(図18)システムの結びつきが繰り返し起こり、位置関係の経験として更に結びつくことで(図19)やがて建物全体の経験として認識していくことができるのではないかと考える。システムとシステムを結びつけるためにはシステム間の手掛かりの重複が必要であると考える。

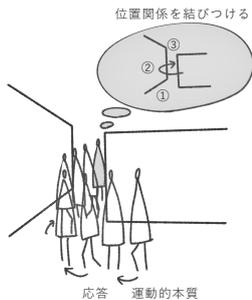


図18 システムの結びつき

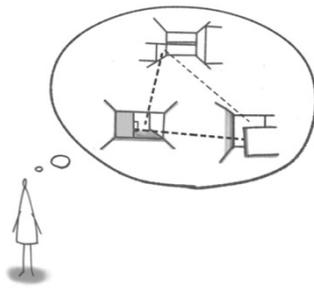


図19 結びつける

6. 設計提案

6-1. プログラム

運動的本質が呼び起こされる方法を用いて、本屋の提案を行う。近年電子書籍などの普及により本屋の数は減少し続けている。しかし、本屋には身体的な空間の中で本に出会い手に入れるという心が躍る体験があり、実空間でしか体験できない豊さがあると思う。人々の行動の手前に無意識に働く運動的本質を取り上げる本提案において、本屋が持つ本来の豊かさを更に増幅させ、彷徨いながら宝探しをするように本に出会う空間を提案する。そして、本屋に行くということも動機づける本屋を目指す。

6-2. 敷地

東京都新宿区内藤町11の新宿御苑の広場の一角とする。風景式庭園や整形形式庭園、日本庭園、温室などがあり、様々な特色の庭園がある。新宿御苑には年間約2万人が訪れ、季節によって様々な展示やイベントが開かれている。²⁾公園の中には食堂や喫茶店の他、2024年10月よりコワーキングスペースが開設され様々な人が訪れる場所になっている。風景式庭園には、サクラやケヤキなどの樹木と芝生が広々と広がっており、人々が自由に歩くことができる空間が広がっている³⁾ため、風景式庭園の一角を敷地とする。この場所に運動的本質が働く本屋を提案することで、公園に訪れた人が散歩の途中に彷徨いながら建物に入り本と出会う空間を提案する。

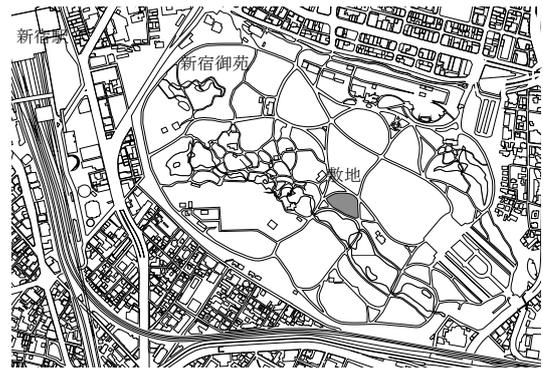


図20 敷地

6-3. 設計提案

6-3-1. 運動的本質が働く空間構成

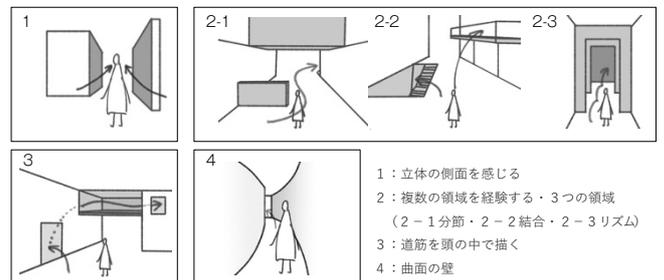


図21 運動的本質が働く空間構成

平面や曲面によって側面を認識し、分節・結合・リズムによって領域を分け、それらが3つ連なることが大切である。そしてそれらを頭の中で道筋を描きながら繋げていくことができる場所が、運動的本質を動機づけるものになるのではないかと考える。これらの要素から運動的本質が働く場面をスケッチし空間にする。

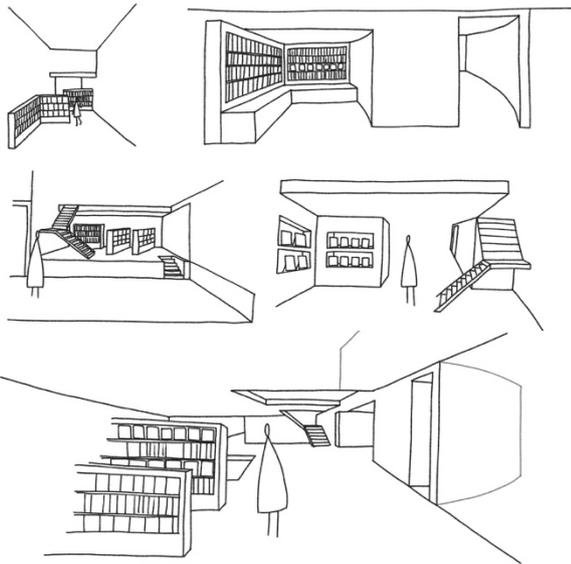


図 2 2 イメージスケッチ

6-3-2. システムの結びつき方

運動と知覚が一つになったシステムの結びつき方は中心から広がっていく分岐や円環状になっている形、枝分かれするツリー、それぞれが結ばれるセミラティス状など様々な結びつき方があり、これらは場所や建築のプログラムによって適している形があると考えられる。(図 2 3)

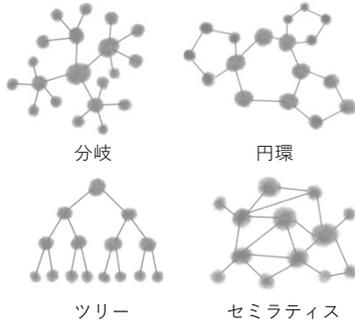


図 2 3 結びつき方

本屋は彷徨いながら自由に行き来する多様な知覚と運動のシステムが働くプログラムである。そのため運動的本質が働くように構成した3つの領域の一つを、他の3つの領域の連なりと関連するように構成することで(図 2 4) 関連している要素を手掛かりにセミラティス状に経験が結ばれていくようにする。その結果、行き来しながら頭の中で結びつけられる建築を目指す。

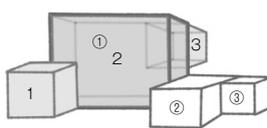


図 2 4 領域の1つを関連させる



図 2 5 セミラティス状

6-3-3. 周辺環境の特色から運動の本質が働く形

次に、周辺環境の特色から運動の本質が働く形を考え無意識に入りたくなるような構成を考える。

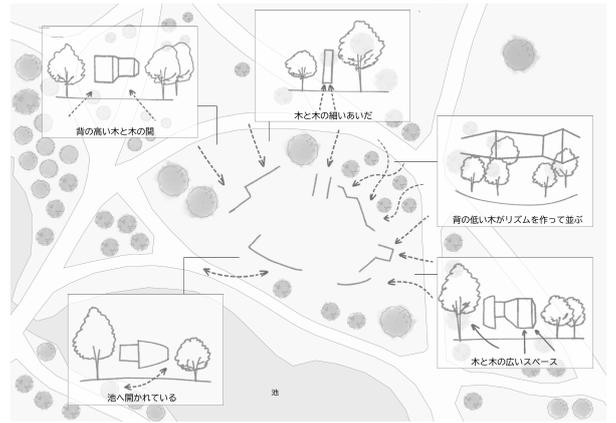


図 2 6 周辺環境から読み取る

また、敷地の周りの木々や池なども時折結ばれることで、新宿御苑の中での位置関係も知覚しより身体と場所との結びつきが強くなるようにする。

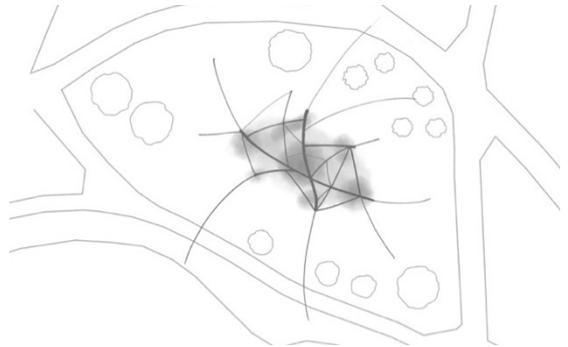


図 2 7 運動の本質がセミラティス状に内外で繋がるイメージ

7. 結論

本研究では行動の手前にある無意識に働く運動の本質について、メルロ=ポンティの『知覚の現象学』から知覚論を引用し空間分析を行い、それらが誘発される空間の構成を考察し明らかにした。建築の構成によって運動の本質を誘発することで、彷徨うように空間を体験し知覚と運動のシステムを繰り返す。そして、その中で認識した位置関係を経験の中心にて結びつけ、より位置関係を明瞭に理解し、身体と空間が結ばれたと感じる建築を目指した。人々の無意識に働きかける運動の本質を持つ空間により、豊かな出会いが自然と生まれ、人々の心が満たされる体験に繋がるのではないかと。

参考文献

- 1) M.メルロ=ポンティ,中島盛夫 訳:知覚の現象学,法政大学出版局,改装版第3刷,2022年10月14日
- 2) 環境省:新宿御苑累計来園者数,
https://www.env.go.jp/garden/shinjukugyoen/news/topics_00056.html,
2024年4月11日
- 3) 一般財団法人国民公園協会 新宿御苑:施設・みどころ,
<https://fng.or.jp/shinjuku/place/garden/>,2024年11月28日

引用文献

- ※1) ARCHI-GRAPHY:「原美術館一初期モダニズム邸宅建築で現代アートを楽しむ」 <https://archi-graphy.com/haragallery/>,
2024年12月03日